

かた  
潟がた  
語

り

(四十)

文・小西 一三  
絵・小西 由紀子

## 潟を撮り続けた写真屋さん その二

八坂神社前にある「こだま商会」。ご主人の児玉英逸さん(74)は羽立の生まれ。仙台で写真の修業をした後、二十歳の頃に帰郷。天王の「写真屋さん」と呼ばれ、結婚式など記念写真や潟周辺のさまざまな写真を撮り続けてきました。

オートバイの荷台に機材を積んで、あちこち撮りに行ったなあ。

干拓の前後から結婚式の写真など注文はけっこうあった。集合写真や記念写真などいっぱい撮ったけど、中でも思い出すのは大崎の結婚式の撮影だな。お嫁さんは大久保の方から馬ソリに乗って来るようになっていたけど、待てる時間も待てる時間もやってくる。結局、到着したのは約束の時間の2時間半後。今の時代だったら大騒ぎだろうけど、当時はそれでもなかった。おおらかな時代だったんだな。

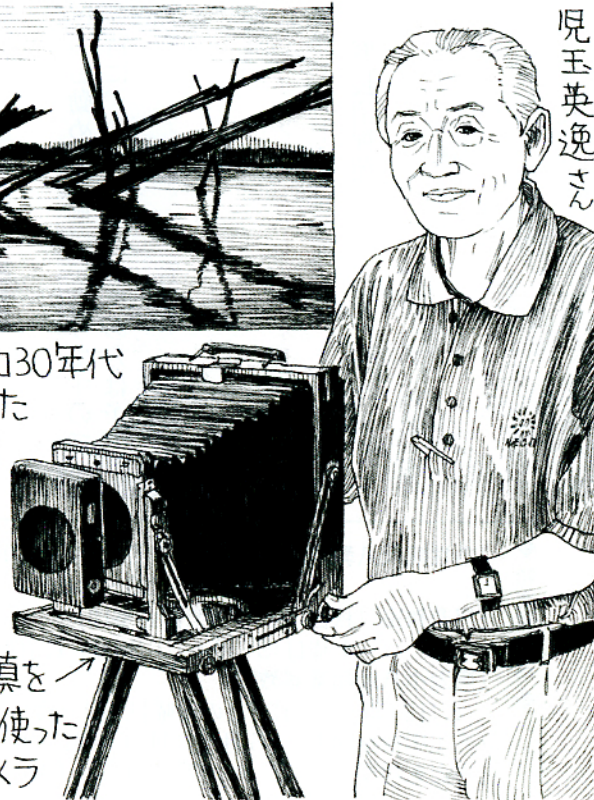
集合写真を撮るのは蛇腹式の大きなカメラで、フィルムはガラス乾板。フラッシュなどの機材一式を250CCのホンダドリーム号に積んで出かけた。当時、フラッシュはマグネシウムの粉を発火させていた。露出計もないもんだから、レンズの絞りやフラッシュの光量は経験と勘だけが頼りだ。暗い時や奥まで光をまわす時はマグネシウムの量を多くしなければならぬ。失敗もあったな。「はい、撮ります」と言ってフラッシュのボタンを押したけど、発火しない。「あれ？変だな」と顔を近づけたとたん、バツと発火。もう少しで大やけどをするところだった。撮影が終わると自

宅の暗室にこもって現像と焼き付け。もちろん全て白黒の写真でした。

こんな仕事をしながらも、35ミリの小さなカメラを持って潟周辺の景色や暮らしを撮り歩いた。そんな写真は中央のカメラ雑誌に投稿する。雑誌に掲載されれば励みになるし、他の人の作品を見れば勉強になる。干拓前後の漁の様子や漁師さんなど、随分撮らせてもらったなあ。かなりの枚数になるけども、フィルムは整理して今でも大切に保管している。

写真の仕事を止めようと思ったのは、デジカメが登場してから。撮影してプリンターに接続すると、その場でプリントができる。誰でも手軽に簡単に写せるし、もう俺の時代じゃないと思った。デジカメ？持っていないよ。今でも撮影する時はフィルムのカメラだもの。

児玉英逸さん



昭和30年代  
に撮った  
自宅近  
くの  
潟の  
写真

集合写真を撮るのに使った  
大型カメラ